

## 1・陸前高田市における文化財レスキュー

熊谷 賢 陸前高田市立博物館 主任学芸員

## 0.はじめに

## 0-1 陸前高田市を襲った大津波

3月11日、午後2時46分。これまで経験したことのない大きく、長い揺れが陸前高田市を襲った。地震による家屋倒壊はほとんど皆無であったが、その約30分後、大津波が襲来した。パキパキと不気味な音を立てながら襲ってくる瓦礫の山は、家々を破壊し、逃げ遅れた人々を飲み込んでいった。避難した市役所の屋上にまで波は襲ってきた。市役所の向かい側に位置し、教育委員会の入っている市民会館は完全に水没した。10～15分間も高さ15mほどの海水の流れは続いた。その後、猛烈な勢いで波は引いて行った。この引き波では多くの瓦礫と共に家屋の屋根の部分だけが海に向かって流れて行き、その屋根の上に子供だけが取り残されているという光景も目の当たりにした。建物の1階の天井部分が見える程度まで波が引いた時、次の波が襲って来て再び2階まで水没した。家族の安否も分らないまま翌日を迎え、市街地を見渡すと鉄筋コンクリートの建物がわずかに残るだけの陸前高田市になっていた。その鉄筋コンクリートの建物の中に陸前高田市立博物館、陸前高田市海と貝のミュージアムなどの文化施設があった。翌朝、大量の瓦礫、泥、ご遺体で埋め尽くされた町を歩いて災害対策本部となった高台の施設に移動し、休むことなく被災者、避難所の対応に従事することとなった。

大津波は死者・行方不明者1800名強、犠牲者の数は人口の約1割にも相当する大きな被害をもたらした。市職員の三分



陸前高田市を襲う大津波（佐藤敏通氏 撮影）

の一が犠牲となり、行政機能が完全に麻痺する事態となった。日々届けられる救援物資の受入、仕分け、配送作業などへの対応に追われ、博物館資料のレスキュー作業については頭の片隅にはあっても行動を起こせる状況ではなかった。家族の安否も不明のままの作業は不眠不休の状態であり、心身共に疲弊した状態が非常に長く続いた。

## 0-2 文化施設の状況

文化施設の状況を初めて確認できたのは3日目の夕方であった。海と貝のミュージアムは海岸部に近い分だけ海水だけが入ったので、驚くほど瓦礫の量は少なかったが、館内の状況は惨憺たるものであった。陸前高田市立博物館に至っては館内に破壊された家屋、車など大量の瓦礫が流入しており、館内に入れる状態ではなかった。

市立図書館も博物館同様の状態であったが、岩手県指定文化財の「吉田家文書」は完全に海水損したが、2階の重要書庫内に留まり流失は免れた。埋蔵文化財整理室は、建物自体が一部を除いて残っていなかったため、出土遺物のほとんどが流失したのではないかと考えた。この3日目の状況確認が後のレスキューの順位を決定づけるものとなった。

## 1. 一次レスキュー

## 1-1 レスキューチームの立上と連絡

3月下旬になり、博物館職員全員が犠牲となったことを受け、4つの文化施設の資料のレスキューを命じられた。学芸員で生き残ったのは私一人であり、博物館を管轄する教育委員会生涯学習課職員も2名以外は犠牲となったため、レスキュー体制をどのように構築するかという問題に直面した。レスキューには一般のボランティアを投入するとその回収率に大きく影響を与えるものと考え、博物館の前非常勤学芸員、専門研究員、海と貝のミュージアム嘱託職員、生涯学習課嘱託職員などに声を掛け、この時点で最強と思われるチームを組織し、4月1日からのレスキュー活動に臨んだ。しかし、11名のスタッフのうち7名は自宅、家族を失った被災者であり、全員が揃ったのは4月下旬であった。

自分たちだけで始めたレスキューは、危険な被災現場に丸腰で入り、資材もほとんどない状態で展開された。最初に手掛け

た市立図書館の吉田家文書は一刻も早く適切な処理をする必要があったため、日頃から懇意にいただいている大船渡市の学芸員に電話で相談し、一関市博物館にレスキューの要請を出した。この要請が陸前高田市からの最初の応援要請であった。これにより、岩手県内の博物館ネットワークによって情報が広がり、岩手県教育委員会、岩手県立博物館、遠野市立博物館などを中心に本格的なレスキュー活動が開始された。

## 1-2 海と貝のミュージアムのレスキュー作業

本格的なレスキューの開始は海と貝のミュージアムからであった。レスキューすべき資料が貝類標本であるため資料回収において選択の余地がないことから、短時間で終了できるとの判断であった。海岸に近い施設であることから、余震と更なる津波襲来の危険などに注意を払いながら常に有事の際の避難経路を確認しながらの作業が続いた。ペットボトルの水と栄養補助食品1箱だけの昼食で凌ぎながら数名で開始したレスキューは日が経つにつれ岩手県立博物館、遠野市立博物館の応援が加わり、レスキューに必要な資材や昼食などを携えての応援は本当に有難かった。このように海と貝のミュージアムのレスキューは自衛隊の支援が入る前に地元スタッフと県内関係者のみで行われ、約3週間でほぼ終了した。レスキューされた資料は、収納場所が確保されていなかったため、市当局に何度も依頼し、ようやく山間部の閉校となった旧生出小学校に搬入することとなった。搬入する資料はコレクションの内容によって振り分け、模式標本などの重要標本は、現場から直接岩手県立博物館に移送していただいた。



海と貝のミュージアム展示室の被災状況

## 1-3 陸前高田市立博物館のレスキュー作業

市立博物館のレスキューは瓦礫の撤去から始まり、床面に50cm以上堆積した砂泥の中からの回収作業であった。瓦礫の撤去はかなりの困難を極めていたが、4月下旬からの自衛隊の支援が入ってからは一気に加速した。自衛隊はご遺体の搜索が



瓦礫と砂泥の中で始まったレスキュー（陸前高田市博）



自衛隊の支援により瓦礫撤去が加速した

目的であったが、非公式に協力を依頼したところ、瓦礫の撤去が終了しないと搜索も不可能という判断をいただき、協力を仰ぐこととなった。現地スタッフと岩手県博を中心とするレスキューでは、大量の瓦礫の流入した市立博物館のレスキュー活動は限界があったが、30名程度の自衛隊員の協力によって瓦礫の撤去、資料の搬出、大型資料の移動、旧生出小学校への資料移送などすべての面で膠着しつつあった状況を打破することができ、作業全体のスピードアップがなされた。自衛隊によるレスキュー活動に当たっては瓦礫の中に含まれていると予想される資料情報を伝え、細心の注意を払っていただきながら行っていただいた。作業にあたる自衛隊には、判断に迷うものはその都度支持を仰いでいただくようにも伝えた。作業開始直後は、現地スタッフの中での指示系統が自衛隊側によく伝わっていなかったため、戸惑った部分もあったが、問題点を話し合い、指示系統を明確にすることで問題は解決され、スムーズな作業が行えるようになった。団体の応援が入る場合には現地スタッフの指示系統やその団体との調整が重要であると強く感じたが、すべてに気を配ることができなかったのも事実である。その部

分を補っていただけたのが元館長、県立博物館の方々であった。搬出された資料は市街地から16km離れた山間部の旧生出小学校に搬入したが、それまで軽トラック1台で劣悪な道路状況の中、往復2時間を要していた。自衛隊の2tトラック3台による移送作業は現場からの搬出を一気に加速させた。

なお、市立博物館の資料は昆虫標本、植物標本を岩手県立博物館に、鳥類剥製標本は旧知の富岡直人氏の御協力を得て岡山理科大学に移送した。

#### 1-4 一次レスキューのまとめ

このように陸前高田市における一次レスキューは、岩手県教委、市町村教委、博物館ネットワークと自衛隊によって行われた。被災文化財等救援委員会による文化財レスキューについては、5月の連休過ぎに初めてその情報が入ったが、具体的な動きをよく理解することが出来なかったため、一次レスキューは独自の体制によって行われ6月17日をもって一応の終了を見た。この市立博物館のレスキューでは岩手県立博物館のすべての分野の職員が応援に駆け付けて下さった。総合博物館であるため自然史系、人文系ありとあらゆる資料が混在するため各専門分野の先生方によるレスキューには本当に助けられた思いであった。特に考古担当の方々には連日盛岡から通って来ていただき、その日の作業の進め方、自衛隊への作業指示など全体的なレスキューの流れを作っていただいた。現地担当である我々の意思を尊重していただきながらの打ち合わせによってスムーズな一次レスキューが行われたことは言うまでもなく、安心して現場を任せられる環境を作っていただけたことに感謝したい。

一次レスキューにおいて最後まで現場に残された資料が、化石を含んだ大きな岩体であった。これらは、化石の産状を示す貴重な資料であるが、その重量により移送を一旦は諦めかけたが、日本地質学会の支援をいただき移送先の旧生出小学校に運び込むことができた。この化石資料の移送によって一次レスキューを完了することができた。

## 2. 安定化処理

### 2-1 一時保管場所の状況と安定化処理

レスキューされた資料が搬入された閉校となった旧生出小学校は、小規模校であるが、当初は被災者の方々の避難所になる予定もあって、すべての教室を使用することはできなかった。一番期待していた体育館に至っては、すでに救援物資の保管場所となっており、資料を搬入できるような状況ではなかった。被災地では残った公共施設などは、避難所、救援物資の保管場所、遺体安置所などすべてが使用されるのである。したがって、有事に備えた博物館資料等の搬入場所を平時から準備しておく



旧生出小に資料を搬入・保管

必要がある。陸前高田市の場合、この旧生出小学校が使用できたことは文化財レスキューにとって非常に大きかった。

旧生出小学校では、各教室にブルーシートを敷き、何の処理もしないままの資料をひたすら搬入した。博物館職員としては、汚損のこと、資料を積み重ねて置くことなど平時では考えられないことをスタッフに指示せざるを得なかったことを理解していただきたい。

回収された資料は自然史系、人文系とありとあらゆる資料があり、その数は文化4施設の合計約31万点である。このうち、昆虫標本、植物標本は岩手県立博物館から西日本自然史博物館ネットワークや昆虫担当学芸員協議会などに支援を呼び掛けていただき、全国30を越す博物館、大学などで安定化処理が進められた。これは、自然史系の博物館のネットワークによるところが大きく、学芸員個人の日頃からの繋がりが機能的に働いた証である。その他の自然史系の資料については、海と貝のミュージアム所蔵のツチクジラ剥製が国立科学博物館筑波研究施設、剥製標本が岡山理科大学、倉敷市立自然史博物館、山科鳥類研究所などで安定化処理及びその後の一時保管が行われている。また、全国各地で安定化処理が進められている植物・昆虫標本については処理終了後、岩手県立博物館で一時保管していただく予定である。また、人文系資料としては美術品が全国美術館会議によって安定化処理が施され、その後岩手県立美術館に一時保管され、石碑拓本の軸物は奥州市埋蔵文化財センターによる作業場所のご提供をいただき、東京国立博物館、文化財保存支援機構の御協力によって本紙外し及び安定化処理がなされ、本紙は一関市博物館において一時保管されている。写真資料などについては早稲田システム及び陸前高田被災資料デジタル化プロジェクト実行委員会によって現在洗浄及びデジタル化が進められている。古い教科書類等の紙資料は山形文化遺産防災ネットワークで処理が行われている。このほかに約十万点の資料について岩手県立博物館において安定化処理、一時保



管が続けられている。

今回の文化財レスキューでは被災文化財等救援委員会ということで、「等」の部分で自然史系資料もレスキューされているものもあるが、すべてがそうではない。これは、自然史関係は個人的な繋がりによる動きの方が文化財レスキューより早かったこと。「等」の部分による自然史系資料のレスキューというものが残念ながら広く周知徹底されなかったことで、その動きがよく理解されなかったためと思われる。

また、旧生出小学校での作業に当たっては、旧知の個人、博物館、研究機関からの資料提供を頂いている。中でも三菱ガス化学には金属資料等の劣化を遅らせるためのガスバリア袋とRP剤を多量にご提供いただいた。

旧生出小学校における安定化処理に係る支援としては、岩手県立博物館による考古、民俗分野の学芸員による支援を資料の移送直後からいただき、現在でも継続中である。遠野市立博物館においても民俗資料を中心に同様の支援を頂いている。日本古生物学会・日本地質学会には陸前高田市立博物館地質標本救済事業を立ち上げていただき、2度に渡って地質資料の洗浄、除菌作業等の支援を頂いている。日本民俗建築学会には、民具の洗浄作業を頂いている。

## 2-2 文化庁による文化財レスキューの支援受け入れ

我々が救援委員会のご支援をいただけるようになったのは6月中旬であった。民具資料の応急処置が最初であった。

それまでは安定化処理の手順も方針を固めていない状態で「脱塩」をしなければという脱塩優先で作業を行っていた。この作業は非常に時間を要するため、膨大な資料を前に作業は遅々として進まなかった。そこに救援委員会から民具処理の応援をいただいた。現地としては民具処理のプロ集団による応援であるという認識と、民具以外の資料の処理に追われていたため作業全般を任せる形になった。この作業では主に砂、泥の除去が行われた。

我々としては、除菌、脱塩という処理を考えていたが、適切な設備が整っていないということで、除菌、脱塩は行われなかった。資料数の多さと限られた時間内での作業ということもあって、我々が考えていたものとは異なる結果となったことは残念であった。研究者によってはそこまで脱塩にこだわる必要はないという考え方と、ヘドロを含んだ海水損であることから、除菌、脱塩の処理を行う必要があるとの考え方があり、それぞれの安定化に対する見解の相違によって現場が多少なりとも混乱したのは事実である。しかし、今回の被害はさまざまな物質を含んだ真っ黒い海水による海水損であり、これまで経験したことのないものでその処理方法は未確立な部分も多い。乾燥させ、泥、砂を払えばいいのではと考えたのも事実であり、現地の処

理に対する考え方が定まっていなかったことは反省しなければならない。しかし、実際には砂・泥を払うだけではだめであった。私がそれを痛感したのは骨角器の洗浄作業をしている時であった。水道水できれいに砂泥を洗い落とし、一昼夜脱塩のため水に浸漬し、エタノールを噴霧して乾燥させたが、資料そのものに「べとつき」が残った。浸漬の時間を延ばして試してみたが状況は変化しなかった。この時、初めて目に見えない何か表面に付着しているということに気付いたのであった。このまま乾燥してしまうと黴が発生し劣化してしまうであろうことは容易に推測できた。これについては、岩手県立博物館の赤沼英男先生にご指導を仰ぎ、適切な処置の方法をご教示いただいたが、旧生出小学校ですべての骨角器の処理をするのは困難であると判断し、救援委員会に依頼し奈良文化財研究所に資料を託すことにした。

骨角器の状況を確認してからは、すべての資料が同様の状況にあると判断したので、除菌→脱塩→乾燥という処理をすべての資料に施すことを決定した。研究者によってはそこまでとはいう方もいらっしゃるが、経年変化を確認できない状況であることから現在できることはすべて行っておきたいというのが現場の我々の考えである。

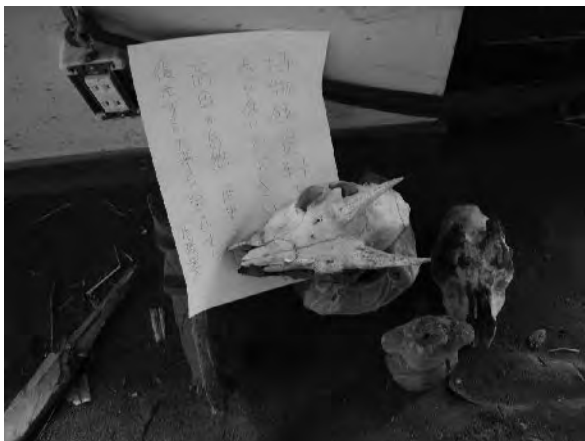
救援委員会の支援の中で、現地の我々が最も信頼を置いたのが、神庭信幸先生によるご指導であった。我々が当事者であるが故に目の前の膨大な資料の安定化処理という大きな課題を抱え、全体の流れを見失いそうになっていた時、何ができて、何ができていないのかという問題点を的確に把握していただき、今、置かれている状況を分析し、短期、長期に渡った作業計画を岩手県立博物館の赤沼先生と共に協議していただいた。それによって、大きな汚損源であった紙資料の冷凍庫への搬出、校舎内の作業空間と収蔵空間との使い分け、効率的な収納保管のための棚の設置、部分的ではあるが資料の燻蒸といった作業がなされ、現場から搬出した資料をそのまま搬入したことによって汚損された校舎内の収蔵環境が徐々に改善されて行った。また、旧生出小学校での安定化処理に至っては、着手すべき資料群と、作業に必要な資材、作業計画などについて岩手県立博物館と連携を図りながら、きめ細かなご指導をいただけたことに感謝申し上げたい。このように陸前高田市では、現地スタッフ、岩手県立博物館（赤沼先生）、救援委員会（神庭先生）の三者で協議しながら作業を進めている状況であり、今後も同様の形態を継続させていきたい。

収蔵環境については、未だ完全な状態ではなく、今後の安定化処理作業を進めるための場所の確保、安定化処理が終了した資料の保管場所の確保、それに伴う環境改善など多くの課題が残されている。この点についても救援委員会のご指導を仰ぎながら着実に進めていけることを希望する。

### 3. 地域の記憶、物語を残すための文化財救援活動

市立博物館のレスキューを開始して間もなく、1枚の書き置きが見つかった。その書き置きには「博物館資料を持ち去らないで下さい。高田の自然、歴史、文化を復元する大事な宝です市教委」と書いてあった。市教委の職員の多くが犠牲となった中でこのような書き置きを残せるものはいなかった。市教委の名を利用して誰かが残してくれたものであった。この書き置きに託された思いは非常に重いものがあった。

我々がレスキューを進めるにあたってスタッフ間で共有してきたことが、「文化財の残らない復興は本当の復興ではない」というものである。我々が考えていたすべてがその書き置きに集約されていた。



この書き置きに託された思いは非常に重い

震災後、海と貝のミュージアムのレスキューを行っていた際、ご家族が津波によって行方不明となった方に「そんな物を探すよりも、人を探せ。」と言われたことがあった。それは、被災直後という状況下において、ある程度予想をしていたことではあったが、実際にその言葉を聞いた時には、やはり後ろめたさに似たものを感じた。我々のなすべきことは何なのか、文化財を残す、博物館資料を残すとは何なのか。被災現場において文化財救援活動を行うものには常に突きつけられる問題だとその時はっきりと認識した。

頭の中では文化財を残すことの重要性は理解しているつもりであるが、正直に言えば、あの時ほどその信念が揺らいだことはなかった。

しかし、それでも、残さなければならないのは、地域の記憶、物語が文化財や博物館資料には内在しているからである。すべてを失った人々が写真や形見となるものを探し求めて瓦礫の中を歩いていたように、今、我々が瓦礫の中から資料を救出し、

それを後世に残さなければ、陸前高田という町そのもののアイデンティティーが失われてしまう。

我々はその思いだけで日々作業を続けている。行方不明となった方々が生活した陸前高田という町を残すために。そして、何よりあの書き置きを残してくださった方のためにも残さなければならないのである。

文化財レスキューは単に文化財や博物館資料を残すだけでなく、それに伴う記憶や思いを残して初めて完結するものであると思う。これが、真鍋真先生が最も重要だと言われたモノとココロをつなぎ合わせる作業である。